教育原理10

八戸学院大学短期大学部
令和4年6月6日（月）

子ども観と教育観の変遷

- 子ども観、教育観とは何か
- 近代的子ども観と教育観
- 生物学的子ども観と教育観
- 構築主義的子ども観と教育観
- 構造主義的子ども観と教育観
- これからの子ども観と教育観
- まとめ

I. 子ども観、教育観とは何か

- 子ども観、教育観を理解する前提として...

目の前の子どもをとらえる事実以上に、「思い込み」や「偏見」が多分に加わることを理解する。

→主観的である子ども観・教育観をもたずに、客観的なそれらはもち得ない。

I. 子ども観、教育観とは何か

- 主観（子ども観・教育観）と事実（子どもや教育）の解釈を時代を追って捉えてみる。

時代や場所によって、「子どもはこうである」「教育とはこうあるべき」と言った考えが理解されるようになるのは、ある特定の主観や立場に、多くの人々が共感ないし納得することで生じる、と押さえる。

I. 子ども観、教育観とは何か

- 普段目にする子どもの姿、その捉え方は、すでに持ち合わせている子ども観によって生じる。

→多々ある子ども観や教育観の中から、自覚的に選び、自分なりの見方を確立して行くことで、その後の教育・保育実践の指針となるはず。

II. 近代的孩子も観と教育観

- 19世紀以前は...

「小さな大人」であり、大人と同様に働き、振る舞っていた。

生まれながらにして墮落した存在として見なされ、体罰などを用いて従わせることがまかり通っていた。

新しい子ども観へ

- ジョン・ロック (イギリス)
- ◆ 子どもの教育による育ちは、大人による子どもへの称揚や称賛、尊重などの情愛による教育によってこそ生まれると考えた。

→性悪説から性善説へ

新しい子ども観へ

- ジャンジャック・ルソー（フランス）
- ◆ 教育は、子どもの進歩と人間の心の自然の歩みに従う営みである。
- ◆ 子どもが生まれながらもっている自然の善性を守りつつ育てていく教育の過程が必要である。

新しい子ども観へ

- フリードリヒ・フレーベル（ドイツ）
- ✦ 人間には神的な力が内在しており、それを引き出すことが教育の使命である、と考えた。

「意識し、思惟し、認識する存在として人間を刺激し、指導して、その内的な法則を、その神的なものを、意識的に、また自己の決定をもって、純粹かつ完全に表現させるようにすること」という教育観。

- ✦ 「遊び」が、人間に内在する本質や可能性を引き出し表現する重要な手段である、と考えた。

新しい子ども観へ

- ホーレス・マン（アメリカ）
- ◆ 子どもへの体罰を厳しく非難した。
- ◆ 教師はその気質において高潔かつ高尚なお手本として、また子どもの中には威厳と学識、博愛を体現したように映るよう振る舞う存在であると、定義した。

近代的子ども観へ

- 近代的子ども観

性悪説から性善説へと転化

- 近代的教育観

体罰といった暴力から、愛情や思いやりといった感情によって大人と子どもが教育的関係を結ぶ。

III. 生物学的子ども観と教育観

- 人間以外の動物においても、「愛に関連した接触によって喜ぶ」と主張し、生物学的に人間と同様であると主張した。（ダーウィン）
- 感情表現を引き起こす心理的な仕組みを明らかにする研究の過程で、子ども期が乳幼児期・児童期・青年期に分かれることを発見した。（ホール）
- 「子どもの権利」を保障することが人類の進化に見合うものと考えた。（エレン・ケイ）

III. 生物学的子ども観と教育観

- 小児医学においては

人種や性別において生得的能力に違いがないことを前提としながら、

発達段階を成熟へのプロセスとみなし、子どもを未熟でか弱い存在として大人とは区別するようになる。

IV. 構築主義的子ども観と教育観

- 子どもの未熟さに対する文化的・社会的捉え

「構築主義」

子どもとは何か、教育とは何かを問う際、その本質や性質を文化や社会に理由を求める。

→子どもの学習環境を改善し、日常生活が見直されれば（構築）、子どもはより学び、よく育つという見方。

IV. 構築主義的子ども観と教育観

- 「環境」への着目（モンテッソーリ）

各々の子どもが置かれた社会環境や生活習慣を理解し、配慮するだけで子どものやる気や態度は著しく向上する、と考えた。

→学校での子どもの態度や学業成績は、その子の家庭状況によって左右されるが、多少の配慮によって教育効果は上がる。

IV. 構築主義的子ども観と教育観

- 「日常」への着目（デューイ）

日常生活や作業、慣習から構成される「いろいろな活動的な仕事」を学校教育に取り入れることで子どもの成長は促される、と考えた。

→子どもの経験を中心に教育を考え、子どもの自発性を重視した。そしてその成長を促すための環境を整えることが教育の役割だとした。

V. 構造主義的子ども観と教育観

- 「構造主義的子ども観、教育観」

ある所属社会や集団において、子どもや教育にある種の均質性や固有さを見つけること。

例えば...資本主義社会（国家）においては、

学校で、「先生と児童生徒」の関係が、職場における「上司と部下」の関係に対応し、上下関係が生まれている。

といったように、その社会の仕組みが教育に影響を与え、労働者としての適性を学校で身につけさせられていると批判した。（ボウルズ、ギンタス）

VI. これからの子ども観と教育観

- 複雑で、曖昧な現代

大人も子どもも、同等な情報量を得ることができる現代

→こうした社会現象は、文化と自然が寄せ集まって実現するような、複雑な実在として理解されるべきである。

→どちらかの立場に立って、子どもや教育について説明することに限界が来ている。

VI. これからの子ども観と教育観

- 「コンピテンシー」という新しい教育観

特定の状況の中で、心理社会的な資源を引き出し、動員することにより複雑な需要に応じる能力。

→知識や学力にとどまらず、人間としてもちうる幅広い能力と責任感

→探究心やコミュニケーション能力、ITやICTの活用スキル、人権の尊重や他者との共存、社会情動的スキル

VI. これからの子ども観と教育観

- これからの時代に向けて
 - ◆ 知識及び技能
 - ◆ 思考力、判断力、表現力
 - ◆ 学びに向かう力、人間性

今回の学習指導要領、幼稚園教育要領等の改訂によって方向付けられた。

VII. まとめ

- 様々な子ども観、教育観があることを理解する

その時代や状況によって、それぞれの「観」が存在する、ということを理解する。

その背景をも理解しようと努めることで、目の前の子どもを理解することにつながるのではないか。

VII. まとめ

- 様々な子ども観、教育観があることを理解する

主観的な見方と客観的な事実の関係を意識して捉えることで、自分の理解をもとに状況を判断することができるようになる。

参考文献

1. シリーズ知のゆりかご「いまがわかる教育原理」

第9章 子ども観と教育観の変遷

西本望編 2018年 株式会社みらい